

## 2千勝不敗伝説の柔道家・前田光世

前坂俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

明治37年(1904)7月28日、ニューヨーク郊外。



日本柔道対米レスリングの異業種格闘技の試合が行われた。講道館の前田光世4段(25歳)対米人レスラー・ブチャーボーイ。在留日本人らで満員の会場の観客はリングの2人を見て驚いた。

身長164センチ、体重67キログラムの小柄の前田に対して、ブチャーボーイは身長185、体重110キログラムの巨漢。前田の背はブチャーの首ほどでまるで大人と子供。

試合は柔道着の三本勝負で行われた。ブチャーが「チビのジャップなどひとひねり」とばかり強引に前に出てきたところを体落とし、巴投げでまず1本、今度は警戒しタックルをかけられ押さえ込まれたところを逆に首絞めで2本をとってわずか20分ほどで前田が完勝した。『柔道強し!』の評判が一挙に高まった。



ちょうど日露戦争の行方が世界の注目を浴びていた頃だ。東洋の一小国日本が大国ロシアと戦い、有色人種が初めて白人の大国を負かしたこの戦争は世界に衝撃を与えた。

『日本人とは一体何者なのか!?!』、

日本文化への強い関心と呼び日本ブーム「ジャポニズム」を巻き起こした。

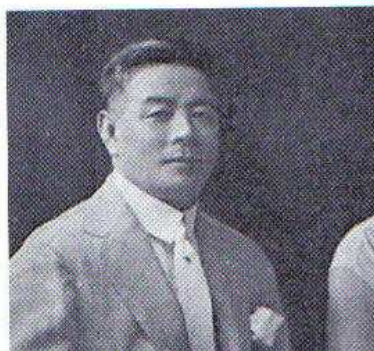
サムライ、武士道、茶道、浮世絵、柔道などの伝統的な日本文化が注目を浴び、中でも、「小人の日本人がロシアの巨人を倒した」勝利の秘訣を「小よく大を制す」「柔よく剛を制する」の柔道に求められ柔道ブームがわき起こった。

前田が世界柔道武者修行の旅に上ったのはこの頃で、柔道の世界的な普及の尖兵となり、連戦連勝向かうところ敵なしの、生涯2千勝無敗という神話を作った。

前田は青森県弘前の出身、早稲田大に進学後、講道館へ入門、明治三七年に渡米した。当時、日本びいきのルーズベルト米大統領は自ら柔道を習い、陸軍士官学校の先生に講道館柔道を採用していた。

前田はニューヨークに道場を開いたが、思うように入門者は集まらず、ボクサー、レスラー、カ自慢たちを相手に懸賞金のかかった異種格闘技を始めた。

その後、全米でも排日移民の動きが強まり、嫌気のさした前田は一九〇七年にイギリスに渡り、ついでベルギー、スペインの欧米から、キューバ、メキシコを転戦し、さらに中南米からブラジルまで足を伸ばした。欧米や中南米諸国では格闘技の興行が盛んであった。この賞金で旅費を稼ぎ、柔道の普及に努めながら各国を転戦しストリートファイトを繰り広げた。



<晩年の前田>

コンデ・コマの愛称は、スペインでニセ柔道家の日本人と戦う時、本名ではまずいのでいい名前はないか「前田コマル」というわけにもいかぬというと、スペイン人がそれでは「コンデ・コマ」ではどうかとって決まったという珍談がある。

前田には2千勝不敗の輝かしい伝説が残されている。これを追跡調査した神山典士「ライオンの夢—前田光世伝」小学館(1997年刊)によると、1907年にイギリスで13戦、08年にはキューバで11戦、09年はメキシコで4戦、10年にはキューバ4戦などの記録が残されており、08—09年にかけて前田はキューバで400試合が行ない、向かうところ敵なしで、コンデ・コマ(高麗伯爵)の愛称でキューバの英雄になった。



<最強のヒクソンスグレイシー>

今もキューバの日系人や現地人はその最強伝説が語り草となっており、まさしく海外版・姿三四郎の世界武者修業であった。

1910年にはブラジルに入り、ブラジル各地を転戦しながらアマゾン流域の町・ベレンに定住した。ここで前田は、アマゾンの開拓事業に取り組み、日本からの移民を支援するとともに、柔道場を作り、後にグレイシー柔術アカデミーの創設者となるカルロ・グレイシーらを育て上げた。

日本に一度も帰ることなく前田は昭和16年にペレンで63歳で亡くなり、忘れ去られた存在と化していた。ところが日本での異種格闘技ブームの中で、 그레이シー家の三男で『400 戦無敗』、柔術界最強の男と呼ばれるヒクソン・ 그레이シーの登場によって再びその不敗伝説がよみがえてきた。

<無断転載禁止>